

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02194

研究課題名(和文)歌舞伎・新派・新国劇等の記録とメディア環境をめぐる研究

研究課題名(英文)A study on recordings and media environments of Kabuki, Shimpa, Shinkokugeki

研究代表者

児玉 竜一 (Kodama, Ryuichi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：10277783

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ニューヨーク公立図書館に所蔵される七代目松本幸四郎の映像を発掘、年代考証の誤りを訂正する成果を得た。年代考証にあたっては雑誌記事が最有力であることを改めて確認した。『伝統芸能放送85年史』のデータ化を進め、放送映像資料の考証方法を確定するとともに、映像の現存状況の概要をつかんだ。<歌舞伎映像大全集>を開催して、歌舞伎映像研究をおおよそ集成することができた。

解説・監修をつとめたSPレコードからの復刻選集「古典は消えてゆく、されど」で芸術祭大賞を受賞、武智鉄二旧蔵SPレコードコレクションの普及に貢献した。以上のような成果の根底にある、演劇雑誌記事の整理・調査の集大成を次の段階の目標としたい。

研究成果の概要(英文)：I got the result of discovering the image of the seventh generation Mr. Koshiro Matsumoto in the New York Public Library, and correcting the erroneous era. In confirming the age, I confirmed again that the article of magazine is most promising. I confirmed the method of verifying the broadcast video material and got an overview of the existing situation of the video. We held the <Kabuki Video Daizenshu> and we were able to gather the Kabuki image research. I won the Arts Festival Grand Prize at Reprint Selection "Classics isappearing, Surely" from SP Records Collection by Takechi Tetsuji, and contributed to dissemination of that collection. I would like to set the culmination of the organizing and surveying of the theater magazine articles underlying the above results as the next stage goal.

研究分野：演劇研究

キーワード：歌舞伎 日本演劇 演劇雑誌 メディア

1. 研究開始当初の背景

今から70年近く前の演劇の、画像・音声・動画などが、どこにどのように残されていて、どう使えるかといった、いわば演劇のメディアリテラシーは、その取り扱いに習熟した者には知られているものの、専門領域がわずかに隣接した分野に及ぶと、まったくわからないという状況にある。その状況を、ジャンル横断的な網羅化によって打開する方法を探る方法が求められている。

研究代表者は、かねてから演劇の画像・音声・映像資料をアカデミズムの俎上に載せるための研究活動を行っており、演劇雑誌と写真資料(画像資料)の歴史的展開の祖述、音声資料を演技研究資料として活用する方法論の開拓、映像資料の発掘と調査・整理を開拓してきた。その結果、歌舞伎・新派・新国劇といった大劇場演劇の音声・映像資料についての概要を把握するに至ったが、さらなる新資料の発掘と、正確な資料残存状況の把握が求められる段階に至ったといえる。

2. 研究の目的

歌舞伎および新派、新国劇などの、主として戦前期までの大劇場演劇が中心として、演劇雑誌の細目、映像資料所在の把握、写真資料集成の方法の模索、音声資料の収集と普及のための方法の模索等を行う。総じて、演劇のメディアリテラシーを明らかにするための基礎研究を行う。

演劇研究が、文学研究を超える側面を持ちうるとすれば、文字資料を超えるイメージを膨らませる資料による肉付けが不可欠である。写真・映像・音声といった記録は、まさにそうした作業のために核心となるべき資料群であるが、本研究は、それらを鳥瞰的に位置づけることを可能にするであろう。いずれ、写真・映像・音声の資料群は、デジタル化によって多くの利用者に共有される資料となるであろうが、本研究は、そのための基礎作業としての側面も持つことになるものと考えられる。

3. 研究の方法

演劇雑誌については、目次細目の収集・調査をすすめるとともに、データ入力のための作業方法を模索するとともに、作業を推進する。あわせて、雑誌掲載の写真資料を含めて、写真資料の収集・整理のための方法を模索する。PDFによる複写集成を主として援用しながら、効率的な作業方法をさぐることにする。音声資料については、主要な所蔵機関の事情を鑑みつつ、公開・普及のための整理を進める。

映像資料については、『伝統芸能放送85年史』をデータ化することによって、放送映像資料の考証方法を確立するとともに、現存資料の概況を把握することを優先し、別途、未発掘の映像資料の発見につとめる。研究代表者がこれまでに概況として把握していると

ころによれば、たとえばNHKが放送文化財として所蔵している映像の過半は、衛星放送およびケーブルテレビ放送の初期に、番組として放映されており、1990年代から2000年代が放送文化財一斉開放の黄金期であったことが知られる。従って、さらなる新資料発掘のためには、興行会社が所蔵する映像資料の把握と、在外資料の新たな発掘とが鍵になるものと推測される。研究代表者は、これまでに現存最古の能楽映像を、パリ郊外のアルペール・カーン博物館において確認したことがあるが、その折に併せて調査したところでは歌舞伎映像はなかった。おそらく、アメリカの公的機関等への調査が有効ではないかと思われる。

画像をどのように演劇研究に活用するかについては、画証資料を取り扱う文学・文化研究の方法を参照することが可能であり、研究代表者は、かねてから役者絵研究の方法と成果を、演劇写真研究に導入することの必要性を提唱してきた。役者絵研究に画期的段階をもたらした改印研究に相当するものは、演劇写真の研究でいえば、撮影者を特定しがたい事例の場合、流通とメディア特性への注目(具体的には、絵はがきとしての共通フォーマットへの着目)が重要になるものと思われる。

4. 研究成果

演劇雑誌については、全冊を所蔵する機関のない『道頓堀』『演藝雑誌』などの収集・整理を進めつつ、新出雑誌の発掘につとめた。この課程で、従来、図書館等が収蔵につとめてこなかった『演藝写真新報』や『演藝』(のちに改題『演藝写真帖』)などの、グラフィック雑誌を多く収集・整理することとなった。演劇のグラフィック誌については、明治期の『グラフィック演藝』以来のタブロイド判の系譜と、代表的な演劇雑誌である『演藝画報』『新演藝』に象徴されるB5版が共存していることをすでに指摘しているが、このほかに同じB5版でも横置き横開きの形式の系譜があることが確認された。このほか、『劇と映画』をほぼ全冊揃えることにより、写真研究との連携について、見通しを得ることができた。

さらには、六代目大谷友右衛門後援会誌『雀』(1919)など、従来まったく知られていない新出誌を発掘する僥倖にも巡り会った。これらをPDF複写の形で集成して、比較・検討・整理を可能とするための方法にも一定の目処が立ったので、今回マンパワーの点で及ばなかった目次のデータ入力と集成を、次の段階での目標としたい。

以上の雑誌研究の成果として、新聞記事によるよりも、雑誌から得られる情報の方が有益である事例が多々あることを再確認し、演劇雑誌研究の重要性をあらためて知ることとなった。

その最たる例は、映像研究における成果の一つとして挙げられる、ニューヨーク・リンカーンセンターの公共図書館所蔵の七代目松本幸四郎関係の映像紹介である（図書【3】）。アメリカのモダン・ダンスの草分けとして知られるデニシオン舞踊団に歌舞伎舞踊を教えているという、異文化交流の点でも興味深い映像であるが、従来知られていた年代考証（ニューヨーク公共図書館による）の誤りを正すことができたのは、演劇雑誌『帝劇』および『芝居とキネマ』の記事博搜によるものであった。同時にこれは、新たな映像資料の発掘は在外機関の搜索、とりわけアメリカの公的機関への調査が鍵となるという見込みを、まさに裏付けするものとなり、今後の映像資料研究の方法および調査範囲の予測を裏付けする意味でも、重要な成果になったものと考えている。この成果については、同時代環境をめぐって、日本演劇の輸出および逆輸入との関連（学会発表【12】）や、同時代の歌舞伎の状況との関係をめぐって敷衍した考察（学会発表【13】）など、いくつかの付随的な成果を得た。

映像研究としては、主要図書館に収蔵が知られていない報告書『伝統芸能放送85年史』を入手する僥倖を得て、これをデータ化することによって、放送映像資料の年代考証の方法をおおよそ確定することができた。また、これによって、歌舞伎および文楽については、どれほどの映像資料が現存しており、どれほどの映像資料がすでに保存環境から失われているかについての概況を把握することができた。放送映像以外の映像を、国立フィルムセンターおよび、インターネット上に公開されたものなどを博搜の上、歌舞伎映像研究のひとつの集大成として、<歌舞伎映像大全集>と題する企画を歌舞伎学会（2017年度）において開催し、映像資料の所在概況について学会報告することができた。さらにその後、演劇映像学連携研究拠点における開催事業として、興行会社の所蔵映像についても知見をくわえることができたので、歌舞伎映像の残存状況についての大半は、押さえ得たものと考えている。

音声資料については、すでに多くの研究が先行しており、各種の目録が冊子体および論文の形で公表されており、資料の所在についての概況は知られているところながら、それらをどのように社会還元してゆくかについての、有効な方法の模索が課題となっていた。幸いにして、研究代表者の権限において複製・公開の方向を推進できる、早稲田大学文学部演劇映像コース室所蔵の武智鉄二旧蔵SPレコードコレクションについて、監修と解説をほどこしたSPレコード音源の復刻企画「古典は消えてゆく、されど」（CD20枚組/図書【2】）によって、2016年度の芸術祭大賞を獲得することができた。社会還元と、一般への普及を願って、同コース室に自らのコレクションを委ねた武智鉄二の遺志に対し

て、いくばくかは報いることができたものと考えている。

以上のような音声資料の整理にあたって、記録内容の把握という点では、最有益な資料のひとつはやはり演劇雑誌記事であり、演劇メディアリテラシーにおいて、根幹と位置づけるべきは、演劇雑誌記事であるといっても過言ではないという実感をつかむに至った。

このほか、音声資料については、すでに発見していたものの、音声という形態の上から発表の機会をなかなか得ることができなかった蠟管音源についての共同研究を口頭発表する機会を得た（学会発表【14】）。日本語学の観点から蠟管資料を精力的に調査・研究されている清水氏と、芸能を記録した古い蠟管を収蔵しておられた松本氏との共同研究により、おそらく現存最古の義太夫節の音声資料を公開発表し得たものである。アメリカのレコード社による出張録音以前の芸能資料は、おそらく初めて出現した資料であるが、録音年月および録音者が不明であるため、利活用の方法が難しいが、音楽としての義太夫節の伝承をめぐるとの参照事例となることは疑いえないところである。

こうした演劇研究におけるメディアリテラシーの方法論そのものについても、音楽研究資料との関連でこれを紹介した雑誌論文【2】（および学会発表【7】）や、前近代の役者絵研究との関連でこれを敷衍・接続させる観点を示した雑誌論文【1】などで、広く見解を提示する機会を得た。さらには、演劇研究資料から読み取りうるもの、あるいは読み取り方の方法をめぐる思索と成果については、国際学会・シンポジウム等の場で、隣接ジャンルの研究者に向けてこれを公表する機会をたびたび得た（図書【5】および、学会発表【2】【5】【8】【10】）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- 【1】 児玉竜一・岩田秀行・新藤茂・倉橋正恵、座談会「役者絵研究をめぐって」、『歌舞伎研究と批評』59号、査読無、2017、5-30p
- 【2】 児玉竜一「演劇資料の整理と公開」、『NEWSLETTER』61、査読無、2017、国際音楽資料情報協会日本支部、3-5p
- 【3】 児玉竜一、石橋健一郎・上村以和於・神山彰、座談会「歌舞伎の戦後七十年」、『歌舞伎研究と批評』55号、査読無、2015、24-54p

〔学会発表〕（計16件）

- 【1】 児玉竜一・田中ゆかり・金水敏・大森洋平・吉川邦夫、シンポジウム「時

- 代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！」
 科研費「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」主催シンポジウム、
 2018年3月9日、早稲田大学
- 【2】 Ryuichi Kodama「歌舞伎における < Authorship >」、ワークシヨップ「Japanese Theater, Publishing Culture, and Authorship」、2018年3月3日、コロンビア大学
- 【3】 児玉竜一・武井協三・高橋則子・光延真哉、シンポジウム「デジタル時代の歌舞伎研究」、2017年12月10日、早稲田大学
- 【4】 児玉竜一・上村以和於・犬丸治、シンポジウム「歌舞伎映像大全集」、2017年12月9日、早稲田大学
- 【5】 児玉竜一、招待講演「資料のデジタル化と演劇の研究 ―くずし字OCRの活用と演劇博物館の試み―」、デジタル文化材創出機構、2017年11月29日、六本木アカデミーヒルズ
- 【6】 児玉竜一・今岡謙太郎・寺田詩麻・中尾薫、シンポジウム「演技の研究をめぐって」、日本演劇学会、2017年11月4日、松山大学
- 【7】 児玉竜一・森本美恵子・遠藤淑恵・永井靖子・鳥海恵司、シンポジウム「公演資料の収集と整理」、2017年6月3日、国際音楽資料情報協会・日本支部、東京音楽大学
- 【8】 Ryuichi Kodama「Traditional Japanese Theater and Theater Studies in a Global Age」、The Yanai Initiative Japanese Performing Arts Program、2017年、カルフォルニア大学LA校
- 【9】 児玉竜一・大笹吉雄・犬丸治・神山彰、シンポジウム「国立劇場の50年」、歌舞伎学会大会、2016年12月10日、二松学舎大学
- 【10】 児玉竜一・稲賀繁美・小野正嗣・小峯和明、シンポジウム「文化生産者としての作者」、SGU大学創成支援事業「国際日本学拠点」シンポジウム、2016年7月26日、早稲田大学
- 【11】 児玉竜一・神山彰・日比野啓・小田中章浩、シンポジウム「聞き書きとデジタル・アーカイブ」、日本演劇学会、2016年7月2日、大阪大学
- 【12】 児玉竜一「1920年代 日本劇と西洋 七代目幸四郎とデニシオン舞踊団を中心に」、楽劇学会例会、2016年4月26日、早稲田大学
- 【13】 児玉竜一「1926年10月31日撮影映像より 七代目松本幸四郎とデニシオン舞踊団」、歌舞伎学会大会、2015年12月13日、共立女子大学
- 【14】 児玉竜一・松本夏樹・清水康行「蝸管による音声・芸能記録とその再現」、楽劇学会例会、2015年11月20日、早稲田大学
- 【15】 児玉竜一・清水拓也・西男久美子・林容市・柳下恵美・(司会)山中玲子、シンポジウム「わざ継承の歴史と現在 身体・記譜・共同体」、法政大学能楽研究所共同研究拠点主催シンポジウム「現代能楽における「型」継承の動態把握」、2015年9月13日、法政大学
- 【16】 児玉竜一・嶋崎聡子・埋忠美沙「歌舞伎のメディア / 歌舞伎というメディア」、日本演劇学会、2015年6月20日、桜美林大学
- 〔図書〕(計5件)
- 【1】 児玉竜一執筆・監修、図録『歌舞伎と文楽のエンパク玉手箱』、2018年3月23日、早稲田大学演劇博物館、64p
- 【2】 児玉竜一執筆・監修、CD20枚付き企画「武智鉄二「古典は消えて行く、されど……」」、2016年11月30日、花もよ編集部 *芸術祭大賞受賞
- 【3】 児玉竜一、「デニシオン舞踊団と七代目松本幸四郎 リンカーン・センター所蔵フィルムから」、図録『Who Dances?』、2015、早稲田大学演劇博物館、222-229p(部分執筆)
- 【4】 児玉竜一「わすれられたシェイクスピア」、『沙翁復興』、2016、早稲田大学演劇博物館、26-31p(部分執筆)
- 【5】 Ryuichi Kodama「Le repartition des salles de theatre et la stratification du theatre au Japon」、『THEATRALITE(S)』、2015年、アルザス日本文化研究所、51-58p(部分執筆)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

児玉 竜一 (KODAMA, Ryuichi)
 早稲田大学・文学学術院・教授
 研究者番号：10277783